

ハバクク書というわずか三つの章からなる小さな預言書が旧約聖書の終わりの方にあります。このハバクク書に書かれている内容は、要約すると、預言者が世の中の荒廃を嘆き、神がそれに応じて慰める、再び預言者は世の後輩を嘆く、神の慰めが告げられる、最後に預言者は、彼の祈りにおいて、救いの到来を預言するのです。その救いは疫病と熱病の荒野から、神が到来するというのです（3章3節以下）。その救いが到来する荒廃しきった世の中とは…

14あなたは人間を海の魚のように／治める者もない、
このもの（群がる虫）のようにされました。15彼らはすべての人を釣にかけて釣り上げ／網に入れて引き寄せ、投網を打って集める。こうして、彼らは喜び躍っています。（ハバクク1章）

海の魚のように「治める者もなくこのもの（群がる虫）のようにされている人間」どうしの関係は、「悪しき者が自分より正しい者を飲み込む」、つまり弱肉強食の関係だとハバククは嘆いているのです。

3・3 神はデマンから／聖なる方はバランの山から来られる。「セラ／その威厳は天を覆い／威光は地に満ちる。4威光の輝きは日の光のようであり／そのきらめきは御手から射出する。御力はその中に隠されている。5疫病は御前に行き／熱病は御足に従う。6主は立って、大地を測り／見渡しして、国々を駆り立てられる。とこしえの山々は砕かれ／永遠の

丘は沈む。しかし、主の道は永遠に変わらない。

イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩きながら（18節）思索したのかもしれない。ハバクク書に描かれているように世の中に悪がはびこり、強い者が弱い者をむさぼる、悪しき者が正しき者たちを飲み込む、そんな世の中にあつて、かつての師である洗礼者ヨハネが捕らえられたと聞いた、ナザレを出て、「悔い改めよ、天の国は近づいた」といって宣べ伝え始められたのでした。（4章12〜17節）

そうしているうちにふたりの男たちが投網を投げ入れられている光景が目に入ってきました。その様子をこらんになり、イエスはふたりに「わたしについてきなさい」と呼びかけたのでした。（18節）

投網を投げ入れる、…経験がありますが…かなりの熟練を要するものです。網を投げて網が空中で拡がり目的とするところに落ちていくのです。スポットで狙うならば網の拡がりを小さめに、広範囲を一網打尽にしたいならば、水面に落ちる瞬間に網が最大限に拡がるようにしなければなりません。それも網の縁に取りつけられた錘によって投げはじめてから網が拡がるまでの時間差を身体で覚えなければなりません。つまり自分の意志と道具の間にはずれがあり、さらに目的に対して的確に投げなければなりません。自分のやりたいことだけにこだわりが強すぎるとだめです。また目的にだけ感心が奪われていもだめです。自分の意志と目的、その間に網という道具があり、それら三つに調和をとることができないと網を投げる動きは極めてぎこちないものになり、目的も

逸してしまうのです。

きつとペトロやアンデレたちは、網の扱いが上手だったのでしよう。彼らの動きを見ながらイエスはふたりに、「わたしについてきなさい」と呼びかけられました。その呼びかけの言葉は、彼らの存在を核心から揺るがし、その生涯を委ね、差し出す覚悟を迫る言葉でした、有無を言わせない衝撃的な響きだったのでしよう。

ふたりは即座に網を捨ててイエスにしたがったのです。

18イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。19イエスは、「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20二人はすぐに網を捨てて従った。

イエスにペトロとアンデレが加わり、3人はさらに進んでいくとヤコブとヨハネが父ゼベダイと一緒に舟の中で網の手入れをしていました。いい仕事をする人は道具を大切にします。網を洗いほつれや破れを修繕している、道具を大切にしているさまを觀て、イエスは彼らもお呼びになりました。ヤコブとヨハネは、財産である舟と父を残してイエスに従いました。仕事を辞して家族を残して「すぐにイエスにしたがったのです。

21そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になる

と、彼らをお呼びになった。22この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。

イエスにしたがったのは直接に呼びかけられた弟子たちだけではありませんでした。(1)ガリラヤで、イエスの教えを会堂で聞いた人たち、彼が宣べ伝える福音を聞いた人たち、病気を癒やされた人たちでした。(2)シリアからも、病気を癒やされた者たち、精神の病を癒やされた者たちがいました。(3)さらにガリラヤ、デカポリス、ユダヤ、ヨルダン川の対岸から大勢の人々が、彼にしたがったのです。

23イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。24そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。25こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

(ここで問います。(ここで集められた弟子たちはイエスの弟子になるための合格のために何らかの基準を満たす人たちだったのでしょうか。立派な人たちはイエスの弟子となるために必要な資質、能力、人格を備えていたのだろうか?。また弟子たち以外にも、会堂で教えを聞いた人たちは、福音を宣べ伝えられた人たち、病を癒やされた人たちは、イエスについて行くために、何らかの基準を満たす人たちだったのでしょうか?)

この問いに対して、わたしたちのうち多くはすでに福音書を終わるまで読んでいたのでわかるのです。つまり彼らはある程度の宣教の務めを担うことはできるが、決して人格を備えていて信頼に足る人間ではなかったのです。弟子たちの筆頭であるペトロをはじめ、根本的にイエスを誤解し、十字架を前にしても来るべき日には、それなりの報償がある、いよいよイエスの十字架を前にした時には、彼を知らないと否定し彼を見捨てて逃げ去る、そんな人間なのです。

そういふ彼らであることを十分にわきまえたうえでイエスは、「わたしについてきなさい」と招かれたのだろうか? ……答えは「そうである、イエスは呼びかける相手の弱さ、愚かさをよくわきまえた上で彼らを招かれた」のだといえます。

推測を補うために、イエスが招いた他の弟子たちや彼に従ったひとたちについて思い起こしてみます。福音書はすべての弟子たちを紹介していませんが、イエスを銀貨30枚で売り渡したイスカリオテのユダ、十字架の直前にイエスを捉えに来た兵士の耳を切り落とした熱心党のシモン、そのほかにあのマリヤ、収税人ザアカイ、…いずれも曰く付き、訳ありの人たちのようです。悪人が跋扈し正しいひとを飲み込む、そんな世の中をよく知っている人たち、彼ら自身が決して善人であると胸を張って見えるような人間ではないことが、自他共によくわかっていた人たちのようです。イエスはそういう人たちを必要とし、「わたしについてきなさい」「あなたの家に行く」と進んで関わりをもつことなのです。

なぜか?彼らは悪を知っているからです。苦しみを知っているからなのです。悲しみを知っている病を知っているからなのです。

16見よ、わたしは多くの漁師を遣わして、彼らを釣り上げさせる、と主は言われる。その後、わたしは多くの狩人を遣わして、すべての山、すべての丘、岩の裂け目から、彼らを狩り出させる。17わたしの目は、彼らのすべての道に注がれている。彼らはわたしの前から身を隠すこともできず、その悪をわたしの目から隠すこともできない。(エレミヤ書16章)

ただ彼らには、悪、苦悩、悲嘆に向き合うために何か決定的なものがかけているのです。彼らは集められて、イエスと宣教の旅を共にするために、弟子としてあるいは旅を共にするために戒め、すなわち世に向き合うために必要な戒めを授かるのです。(…5章以下につづく)

それはまず祝福にはじまります、続いて自己理解、世の規範である法に対する理解、情動的な自己管理規制、異性との関わりに関する戒め、家族に関する規定、神との間に誓いは不要であること、報復の禁止、敵対する者への態度、施しについて、祈りについて、断食の規定、富に関する規定、衣服や食に関する態度、裁きの中心に立つてはならない戒め、必要なものをためらいなく求めること、などです。(マタイ5、7章)